

第4回(仮称)苫小牧市民ホール建設検討委員会 議事要旨

1 日 時 平成27年8月18日(火)14時00分

2 場 所 本庁舎9階 会議室

3 出席者

- (1) 委員6名
- (2) オブザーバー(北海道大学大学院工学研究院)3名
- (3) 事務局 市民生活部長ほか4名
- (4) その他 庁内検討会議メンバー15名

4 次 第

(1) 開会

(2) 第3回(仮称)苫小牧市民ホール建設検討委員会の議事要旨

(委員長)

前回のおさらいということで3点ほど確認しておきたい。

1点目は、私たちは現在、基本構想を策定しているが、基本計画から設計までのプロセスの中で、どのように市民参加を具体的に組み込んでいくのかである。典型的な市民参加にはパブリックコメント等があるが、前回私たちが事例を踏まえて参考になったものは、積極的なワークショップである。分科会を設けて、複合施設それぞれの専門性のある特定のテーマでのワークショップをやりながら、さらに分科会の上位となる委員会での意見・情報交換、相互調整さらにはお互いに協力できる新しいチャレンジを組み込んでいくことで、基本計画から設計の市民参加のプロセスを具体的に考えていくということだったと思う。

2点目は、劇場という機能でいうとイベントが主になりがちだが、市民の方々が特定の目的に依存せずに、ふらっと来ることができるかをいかに仕掛けていくのかである。例えば、前回では茅野市民館の図書館の分室が非常に参考になった。あるいは、アオーレ長岡の場合は、市役所の窓口機能があることによって常に人が出入りしているような賑わいを創出している。人がふらっと来て、無目的な人が滞在できるような仕組みを作っていくことが重要である。そのためには、科学センターや生涯学習機能等の用途を複合施設に積極的に考えていく必要があることである。

3点目は、実際に建物ができた時の維持管理・管理運営方法を早い段階で

考えておく必要があることである。アオーレ長岡の場合は、維持管理におけるハードとソフトの組織運営を意図的に分けることで、ハードの取組みは指定管理者、ソフトの取組みはNPOに任せていたかと思う。また、茅野市民館の場合は、株式会社が運営をしている形態であった。そのような組織をどういう体制にするのか、誰が関わるのか等、これら2つの施設では基本設計が始まる中で維持管理に関わる検討委員会がまた新たに立ち上がるかたちで議論している。そういった維持管理の仕組み、組織、方法、内容ということも早い段階で考えていく必要があるという認識を持っていたかと思う。

以上の3点が事例紹介を含めた要点であった。それを踏まえて、次第3の先進地事例紹介に入っていきたい。

(3) 先進地事例の紹介(千葉市科学館、可児文化創造センター)

基本構想策定委託者である北海道大学大学院工学研究院(以下、北大研究院)が先進地事例として千葉市科学館を紹介。

(委員長)

少し補足させていただくと、テーマによる集約という施設の特徴を説明させていただいたが、千葉市は中心市街地が廃れていった時に、人の賑わいを取り戻そうと子どもを活性化の対象にしようとした。子ども関連の施設を集約することによって親子連れ等に来てもらえるよう、それらを議論していく中で新しく科学館を作ろうとしたのである。したがって、既存の科学センターがあったものを複合化したものではない。しかしながら、当初、相乗効果や複合化のメリットを十分に検討しないまま来てしまった中で何ができるのか、そのチャレンジが「限界と工夫」であり、何らかの形で連携できないか現在でも模索されている。

ただ、最初の建物の作り方と組織の在り方が影響していて、そう簡単にいくものではないと館長のお話にもあった。さらに科学館のリピーター獲得については、展示物はそれなりの金額がするものなので、毎年新しいものを置くわけにはいかない。そうすると、見学者が飽きてきて、何回も来るといことがない中で、子どもというテーマから一歩先に進んだ生涯学習にも力を入れたチャレンジもされている。以上、私の方から補足情報と位置付けについての説明をさせていただいた。

まずは事例紹介について、前回と同じように質問・意見があればお願いしたい。

(委員)

千葉市科学館の竣工年と基本構想の期間がどのくらいであったのか教えていただきたい。

(北大研究院)

千葉市科学館の竣工年は2007年である。基本構想については、それ以前に千葉市の中心市街地活性化の取組みが2000年にあった。また、その頃に千葉市の子ども科学館の構想提案書が策定されていった。その後、庁内の中での様々な調整をしていった中で、2002年に展示基本計画策定業務先委託選定があり、そこでどのような展示を設計していくかという話し合いも始まった。「Qiball (きぼーる)」という複合施設として計画が進んでいくと同時に、市民参加がないまま庁内で科学館の設計の話が進んでいったということである。

(委員長)

補足すると、2000年から2007年までの7年間で最初の2年ほどは、科学館という話ではなく、中心市街地活性化のために子どもをテーマにした話し合いが行われていた。ここでどれだけの市民参加の声があったのかわからないが、聞くところによるとおそらく行政中心的に市街地活性化方策を検討していたとのことである。子どもというテーマが出てきた後に、科学館という構想が出てきて、残り5年のうち最初の1年くらいで設計と展示の業者を選定している。ここに基本構想や基本計画のステップはなく、民間の設計事務所と展示の設計事務所が行政とやりとりしながら、展示物の規模やコンテンツを決めて、実施設計までやった3年間があり、残りの2年間で建設となった。前回の議論にあったワークショップ等はないまま進んでいったと考えられる。

(委員)

既存の科学館に値するものは他にあったのか。

(北大研究院)

既存施設はないが、市民会館のようなところに1つのコーナーとして科学の広場が設置されていた。また、プラネタリウムは千葉市郷土博物館にその機能があった。それと千葉市文化センターに情報と科学のフロアのコーナーを集約して1つの科学館というかたちにしていった。

(委員)

乱暴な言い方にはなるが、従前のハコモノ方式ということになる。そして、科学館以外はテナントということだろうか。

(委員長)

御指摘のとおりだが、科学館もテナントの1つであるといえる。

(委員)

中心市街地活性化をされたとのことで興味深いのだが、具体的にどのような地域を活性化していったのか、駅からの距離やどのような施設があるのか等、御紹介していただきたい。

(北大研究院)

千葉駅からだと徒歩で15分くらい、また乗り換えで私鉄の千葉中央駅に行けるようになっているが、その千葉中央駅の駅前通りがかつての中心市街地で商店街や百貨店があった。それらの施設が千葉駅の方へ移動したことによって、衰退していったという経緯があり、今の商業や交通の中心というのは千葉駅周辺になっていった。

(委員)

建設費はいくらくらいの施設なのか。

(北大研究院)

科学館単体でいうと建設費はおよそ65億円、展示物の関連でおよそ25億円と聞いている。

(委員長)

私の印象になるのだが、素晴らしいと思っている点はいくつかある。科学館としての展示の工夫はかなりされているという印象であった。新しい施設なので、展示物も新しく、最新の技術が使われていた。その中で一番印象的だったのが、ボランティアスタッフが何名も常駐されていることであった。私たちがぼんやりとしていたり、子どもたちがいたりすると声をかけたり、いかに展示を楽しむかということに対してしっかりケアしている。ただ見学して楽しむというだけでなく、人と人とのコミュニケーションをかなり重視している。それをボランティアシステムとしてうまく機能させているのが素晴らしい点として挙げられると思う。

(委員)

ホームページを拝見すると8月は休みがないことになっている。夏休みは全館開館しているということか。

(委員長)

御指摘のとおりである。子ども達の自由研究の相談コーナー等もやっていた。

(北大研究院)

他の行政機能は休みがあるが、科学館自体は年中無休である。

(委員)

参考になる部分としては、ソフト面でこの千葉市科学館がどのようなことをやっているかという点で、子ども達だけを相手にしないで、生涯学習機能を提供していき、大人もうまく巻き込むことによってリピーターを増やしていくということだったと思う。実際にこの生涯学習機会の提供について、稼働率の推移が出ているが、この人数が人口比率でいうとどの程度のものなのか。それと苫小牧市の人口と科学センターの稼働率はどの程度になっているのか。

(北大研究院)

千葉市の人口がおよそ 96 万人になるので、来場者数が年間約 35 万人ということでおおよそ 30%ほどである。また、苫小牧市の人口はおよそ 17 万人であり、近年の年間来場者数はおよそ 9 万人前後で 50%ほどとなる。ただ、千葉市と苫小牧市では人口規模が違うので、ただ単純に比較して参考にするのは難しい部分があるかもしれない。

(委員)

苫小牧市として現在の科学館と同様のものを作るのか、最新のものを作るのか程度はまだこれからの段階のものなのでわからないが、ここで費やしている費用と加えて稼働率によって、どのように運営体制を整えていくことになるのかと思う。千葉市科学館の場合は、元々の発想がただ単に施設を複合化していけばよいという発想なので、根本的なものが違うので参考にならない部分もあるかもしれないが、悪い例としてタテ割りの限界ある中で、市の管轄の問題を含めても、苫小牧市が今後管轄をどのような扱いにしていって、複合化していくのかという点では、タテ割りの限界と工夫というのはまず解決していくべきところだと考えている。

(北大研究院)

印象に残ったのは、科学館がこの複合施設を引っ張っていくという意気込みを持っていたことである。科学館が持つ潜在能力をどう生かせるか、科学館自体をどう発信していくか、それに加えてこの複合施設をどうやってよくしていくかという視点で考えていた。前回まで出てきたものとして例えば、市役所機能や図書館機能があるが、その中の 1 つの機能として科学館の可能性を考えていく余地はあるのではないかと思う。

(委員長)

私の理解では、当初の建物の作り方が足を引っ張っているところが大きく、科学館という用途が複合化に貢献しないという話ではない。限界がある中で、どのような工夫を凝らしているのかというところに着目する価値がある。その中で、私がいくつか関心を持っているものは、企業コーナーの設置である。企業コーナーは13階のビジネス支援センターと連携しているものであり、これから新しく何かをチャレンジしたり、コツコツとモノづくりをやっていたりなどの地元の企業と連携しながら、特徴的なアイデア商品や技術を科学館としてお披露目して、それを市民の方々に理解していただこうとしている。限界がある中でも、このようなチャレンジをしようとしているところは、十分評価すべきところかと思う。スライドでは、「科学展示という柔軟な機能の可能性」というやや難しい表現を使っているのだが、展示したものを学ぶ、体験するような機能を肯定的に捉えたとすると、建物の作り方を工夫すればもっと連携していくことができるのではないかと思う。私見としては、苫小牧市の科学センターは、仮に複合化することになると相当な役割を担ってくると思っている。ちなみに委員の皆様は最近、科学センターに足を運ばれているだろうか。

(委員)

近くにいるが、足は運べていない。

(委員長)

委員会としても理解していないところがあると思っていて、科学センターとして今何をしていて、どれくらいできていて、新しいこととなると何ができるのかというところをもう少し情報を得ておく必要があると思っている。

(委員)

最近の傾向として、市民や民間のホームセンター等が例えば3Dプリンターだとかがそうなのだが、コ・ワーキングという考え方があって、学生や市民、町工場の方々がそういったモノづくりに対しても、取り組みが非常に意欲的になってきている。シリコンバレーや秋葉原にそういったコ・ワーキングセンターが非常にできてきており、学生や企業の支援や小さなアイデアを商品化していった。今やそれらは都市圏だけでなく、地方でもできるものになってきている。市民のアイデアを吸い上げて、応援をしていく企業等が資金面でも非常に増えてきており、科学の観点からみると、工具が置いてあって、3Dプリンターが置けるような自由な場所あればモノづくりが活発な苫小牧市らしい場所になると考えている。そうすると、子どもたちも体験できるし、シニア層でも体験できると感じている。また、リタイアされた人でも世間に対して、商品として売れるような発想が出てくると面白い。

(委員長)

今の御指摘は非常に重要だと思う。これまでの科学センターや科学館はやや受身のところがあったかと思っている。具体的には展示物の説明を読んだり、ボタンを押したらモノが動く等だったと考えているが、例えば茅野市民館もそうなのだが、この千葉市科学館でも工作ができたりする。ボランティアの方がサポートしたりして、個人が専門的な器具や道具を揃えるのはなかなか難しいところを、科学センターで実験器具を揃えておいて、ボランティアスタッフのアドバイスのもとで趣味としてやっていくことができる。そういった場所や設備や、演劇系でも工作系でも近年増えてきている傾向にある。苫小牧市のモノづくりの機運でいくと、ただ単に展示物があって見学するというのではなく、もう少し能動的に環境を使って取り組むことができる施設の在り方がポイントになってくると思う。

(委員)

科学センターだからといって科学にとらわれるのではなく、生涯学習機能の1つとして科学を捉えていくべきである。それに加えて幅を広げていく意味で、ホールも隣接することになるので、音や光の演出とも連携できたりするし、科学だけにとられない生涯学習機能を提供していくことができると思う。

(委員長)

モノづくりという概念を大きく捉えて、音楽にしろ科学にしろ今回の苫小牧市の複合施設は市民が能動的に創造していくことができる環境を整えていくことが、1つ大事な個性になってくるかもしれない。

(委員)

千葉市科学館のプラネタリウムの稼働率が35%というのは、収支からいってもかなりのウエイトを占めているのではないかと思う。例えば、子どもだけでなく、もう少し上の年代を狙った友人・恋人同士や夫婦等2人で音楽を聴きに行き、プラネタリウムを見てレストランに行くという1つの複合的意味合いを持った流れができるのではないかと考えている。

(委員長)

そういう意味でいうと、劇場で音楽を聴いて午後5時にプラネタリウムが閉まっているには意味がない。したがって、それらの施設がどれだけ柔軟に連携していけるかが重要な焦点となってくる。

(委員)

アトリウムを使った様々なイベントを企画しているというのは苫小牧市がこういったことをどう取り入れていくのか、苫小牧市ではパブリックビューイングを使ったイベントというのがあまりない。そういうロビー等を使って市民が集まることのできるイベントを提供できるのは面白いと思う。

(委員長)

以前に、苫小牧市を訪れた時にイオンモールでサッカーのパブリックビューイングをやっていた記憶がある。

(委員)

簡易なものはあるのかもしれないが、例えば市民会館のホール等で大規模なものはやったことはないのではないかと思う。

(委員長)

アトリウムの利活用で補足情報があれば、御紹介願いたい。

(北大研究院)

例えば、理科の先生方でやっているサイエンスクラブがあってその催しや、フラダンス大会を、JICAの国際的な写真展を開催したり等、アトリウムは科学館のものというわけではなく、いわゆる公共的なオープンスペースなので、民間企業から公的な団体まで予約さえすれば誰でも使えるようなかたちになっている。

(委員)

千葉市科学館単体に行きたいという方は、聞いたところ多くいらっしゃるのかと思うが、他の子ども支援館等の施設に並行して行きたいという方々は利用者数のどのくらいの割合いるものなのか。

(北大研究院)

私たちも視察に行った際にそのような質問をさせていただいたが、具体的な数字はわからない。連携にはかなり仕掛けが必要になってくると思う。

(委員長)

それぞれの施設は大変多くの人に来ていた。子ども交流館や子ども支援館にしろ、その中に図書コーナーがあったりして子どもがゲームをしたりして寝転んだりしていた。それぞれのフロアはニーズがあって人は来ているのだが、それが連携しているかという課題がある。もったいないという印象を受けた。それでは時間もあるので、そろそろ次の事例紹介に移りたい。

北大研究院が先進地事例として可児文化創造センターを紹介。

(委員長)

補足すると、劇場ということで学術系のソフト・ハードの専門家の方々に「注目されている劇場はどこか。」という質問をすると、大抵の方がこの可児文化創造センターを挙げられる。それは建物のスペックが最新だからというわけではなくて、公共劇場であることを真摯に考えた取り組みをしているということで注目されている。

税金が投入されていて、公共施設として劇場を運営する時に、何を大事にしなければならないのか。今更で恐縮だが、公共施設は公共サービスを提供する施設であり、納税者にサービスを提供する、ということは全ての納税者に区別があってはならないということになる。公共施設を提供することは、本来ならば納税者に対する区別があってはならない。それがなかなか劇場は専門性の高いものになってくるので、例えば病院のように全ての人たちが同じように利用しやすいかと言われるとそうではない。最近の公共施設は人口減の中でどこの自治体も公共施設の数を減らしていこうと考えるときに、真っ先に減らされていくのは、劇場である。やはり公共施設を考えると、劇場は財政面からいってもなかなか優先度が上がってこない。

しかしながら、むしろこの可児文化創造センターは劇場だからこそできる公共サービスは何かをチャレンジしている。実は可児文化創造センターは2回注目されている経緯がある。1回目に市民参加の施設づくりということで、ワークショップを多く実施して、綿密に建物を作っていたのだが、オープンして暫くは稼働率が上がらなかった。それは衛館長の前からチャレンジが始まっているのだが、民間と同じような劇場ではなく、公共施設としての劇場のあるべき姿を運営・サービスのプログラムに反映させていった。

また、スライドには包摂的な社会機関と記載があるが、ユニバーサルデザイン等が関連概念になってくる。要は分け隔てなく全ての人にケアしていこうということである。娯楽というとお金を持った特定の趣味を持った人たちのものとなるが、そうではない公共施設として運営をしていき、例えば障害を持っておられる方々やあまりお金を持っていない方々にも、芸術・劇場という経験の機会を与えるためには何ができるのか、様々な関連施設と連携しながら、多くのプログラムを組んでいる。その象徴として足ながおじさんプロジェクトや多文化共生プログラム等があり、私たちが視察に行った時にロフトと呼ばれるスペースで、身体的・知的に障害を持った方々がダンスの練習をされていた。そういった方々にもダンスの練習の成果を発表しようといった機会も設けようとしていた。そういった意味で、この施設は注目されている。それでは同様に、御意見や御質問があればお願いしたい。

(委員)

劇場ということで、苫小牧市に当てはめてみても伝統的な芸術の殿堂を造ろうとしているわけではなく、全ての市民に開放された施設を作っていくという方向に向かっていると思う。アウトリーチの方法にある集客から創客という言葉があるが、劇場にとらわれず今考えている5施設を複合化していくということは、全てにおいてこのコンセプトが参考になると思うし、接客意識も素晴らしいと思う。本当に理想的な造り方な取組みをされているので、市の意識も大切になってくる。

(委員)

可児文化創造センターの建設費はどのくらいか。

(北大研究院)

建設費はおよそ84.7億円である。主要なところで建築の部分でおよそ40億円、機材でおよそ15億円、電気工事でおよそ8億円となっている。

(委員長)

施設の機能としては、劇場単機能の中にちょっとしたパブリックスペースと展示コーナー、レストランが併設されているかたちになる。施設としては複合施設とは言えないので、建設費もコンパクトなものになっている。

(北大研究院)

いわゆる主たるホールに属しているものとしては、共用スペースであったり、ギャラリーや大道具や小道具の方々が普段使用されるような場所を一般の方々に開放してちょっとした大工仕事ができるようになっている。プロの方がプロの演劇用に使われるよう時もあれば、一般市民が使われるような時もある。

(委員)

今、御説明された中に「公共施設」という言葉と「公共施設なのに」、
「公共施設だから」という言葉があったかと思う。「公共施設なのに」サービスが良いという意味で使われていると思うのだが、今回の検討委員会での私たちのテーマはNPOが運営するなり、株式会社が運営するなり、私は公共施設だから本当はスタッフが笑顔で、どこのホテルよりもサービスが良いというのは、「公共施設だから」というのが本来だと思う。運営にしる、市民参加にしる、ここが非常にポイントなのではないかと思う。基本構想のクオリティはここにある。

(委員長)

可児文化創造センターの事例で顕著に示されているのが、最初建物を懸命に造っ

たのだが、あまり人が来なかった。それが経営理念とソフト面でのプログラムを抜本的に一新することによって、ガラッと変わった。ということは、何をするのか、どのような理念にするのか、そこで勤めておられる方々がどういった意識を持って働いているのか、そこにやはり「公共施設だから」、こうあるべきだという理想をしっかりと浸透しているところが、この可児文化創造センターの事例として注目すべきポイントかと思う。視察に伺った時に、衛館長は著名であるので話馴れているが、職員の方々も非常に丁寧なサービスを心掛けていた。

(委員)

衛館長が来られたのはいつ頃か。また、この施設がオープンしたのはいつ頃か。ホールを拝見するとクラシックの方々が相当なお金をかけている印象がある。

(北大研究院)

衛館長が来られたのは、平成19年である。施設のオープンは平成14年となっている。

(委員長)

衛館長から話を聞いて1つ印象的だったのは、衛館長が最初から包摂的な公共劇場を嗜好していたかということとそうではない。イングランドのリーズ市の劇場を訪れて、考え方がかなり変わったと仰っていた。それまでは専門性の高いプロのスペックを備えた劇場とそのプログラムを基準としていたが、リーズ市でのコミュニティプログラムを劇場でやるという出会いがあって、本来、公共劇場は全ての市民に向けていくべきなのでないかということ率直に話されていたことは非常に印象深かった。この可児市の取組みと理念は非常に参考になるかと思う。

(委員)

千葉市科学館のアトリウムと可児文化創造センターの造り方を見ると非常に違いを感じる。建築後の維持費については、北海道は暖房費がかかるので、そこまで考えていかないと莫大な経費がかさんでしまう。

(委員長)

前回までも日常的利用の場所として、オープンスペースが話題として出てきていると思うが、可児文化創造センターは劇場施設なのだが、劇場には全く関係ない人たちも来ている。子どもたちがカードゲームをしていたり、中高年の方々がパソコンで調べ物をしていたり、視察をしに行ったらこちらが楽しくなるような印象であった。

(北大研究院)

劇場よりもむしろオープンスペースを目的に来ている人も多いようであった。ホールの特長な機能という面でも、舞台の技術を教えるワークショップ等を開催していた。

(委員)

可児文化創造センターにいるような無目的な人は苦小牧市の市民会館にはいない。自由に何でもできるというのが非常に重要である。

(委員長)

レストランについても広場に面していて、うまく集客を狙っていた。お洒落にランチをとってコーヒーを飲むといったような過ごし方もできる。

(委員)

さまざまなワークショップを開催することによって、そのジャンルに対しての興味を持ってもらったりということは非常に参考になると思う。

(委員長)

コンサートチケットが高いとの御指摘があったが、DANDAN チケットの制度で当日購入すると半額になったりする。

(委員)

実は苦小牧市でも日本フィルがアウトリーチのようなかたちで来ていた経緯があった。

(委員長)

提携の仕方と持続の仕組みを積極的に考えていくべきである。

(委員)

前回に引き続き、様々な事例を見せていただいたが、苦小牧市も複合型の公共施設ということで、市民の居場所作りということを改めて考えていきたいと感じた。前回のアオーレ長岡のような複合施設であれば、運営方法等も考えていかなければならない。単独であっても、可児市のような相当な理念とコンセプトのもと、人が集まれるような仕組みづくりをしていく必要があることを感じた。苦小牧市がどこまで目指せるかわからないが、複合的なかたちで市民の方々を集められる施設と機能を考えていかなければならないと思う。

(委員長)

複合化のメリットもあると思うし、将来的には実現可能性を練っていかないといけないが構想段階ではこうあるべきだということを打ち出すだけで結構だと思う。また、実際に衛館長には「可児市のように劇場は単機能だが、複合施設を運営していくとしたらどう考えていくか。」という質問を試みた。「複合施設としてのハンドリングを誰がしていくのかというところは非常に難しいところだと思う。」という話をされていた。こういった課題は苫小牧市として乗り越えていかなければいけないが、理念を持つことの重要性というのは可児市の事例で示されたのではないかなと思う。時間となったが、最後に何か御質問や御意見はないだろうか。

(委員長)

本日も様々な意見が出てきた。要点として2つあったかと思う。

1つ目は今後コンセプトに繋がるであろう非常に重要な部分で創作、創客という言葉が出てきた。受身ではなく、市民が自ら参画して自分がやりたいことを実現できるような環境作りが1つ個性として大切なのではないかと考えている。

2つ目は公共性である。今回は公共複合施設であるということで、公共性というものがただ単に市役所が管理しているとか、税金が投入されているということだけでなく、社会包摂的な考え方のもと考えていくことが必要であると思っている。

また、これらを踏まえて、委員の皆様がやっておくべき点が2つあると思う。

1つ目は苫小牧市の上位計画といわれるまちづくりの計画がどういった考え方を持っていて、何を目標にしているのかをおさらいして、改めて理解する必要がある。まちづくりとして捉えるということが重要である。

2つ目は、既存の複合検討施設が現在何をやっているのか、どんなプログラムを持っているのか、現状を改めて理解しなければいけない。それらの理解の進め方については今後、事務局と相談したいと思うが、次回、次々回で勉強の場としてやっていくのがいいかと考えている。

(委員)

具体的な建設地が出てこない、中心市街地の活性化なのか、駅前の活性化なのか、それ以外なのかがわからない。

(委員長)

御指摘のとおりだと思う。そのあたりも含めて適切な時期に議論ができるようにしないといけないと思っているので、確認してセッティングしたいと考えている。そろそろ具体的な場所がわかった方が議論しやすい。この他にいかがだろうか。

(事務局)

次回の日程等について連絡し、終了。